

1980年代初頭の家具と住生活

—— 明桂寮における家具調査報告（2） ——

Furniture and Life in the Early 1980s
— Report on a Survey of Furniture in the Meikei-ryô Dormitory (2) —

住居学科 薮下 美雪 関村 啓太 藤井 美羽 葉袋 奈美子
Dept. of Housing and Architecture Miyuki Yabushita Keita Sekimura Miu Fujii Namiko Minai

抄 録 本稿では、前稿に引き続き、明桂寮の家具調査とそこに実際に居住した体験をもとに、居室における家具と住生活の関係について論じた。現在の明桂寮においては、著者が1980年代に使用していた家具が残存していることを確認できた。また、現存する家具を使用して、記憶をもとに家具配置を再現し考察した。明桂寮では当時一部屋を2～3人で使っていた。家具の配置によって、生活動線は規定されていたが、寮生の各個人のスペースや共用スペースをゆるやかに分けけて作っていたことを確認することができた。住居学の観点からみると、良好な生活環境と人間関係を作り出したと言える。家具は、寮の共同生活をより良くするために役割を果たし、寮生によって引き継がれてきた。

キーワード：明桂寮，家具と住生活，家具配置，個人スペース，共同生活

Abstract In this paper, following an earlier article and based on a furniture survey in the Meikei-ryô Dormitory and the experience of actually living in the dormitory we discuss the relationship between furniture and living environment in common spaces. In the current Meikei-ryô Dormitory, it was confirmed that the furniture used by the author in the 1980s remains. In addition, using existing furniture, the furniture arrangement was reproduced and considered based on memory. In the 1980s, two or three people were assigned to each room in the Meikei-ryô Dormitory. Although the types of activities were defined by the arrangement of the furniture, it was confirmed that the dormitory students' individual and common spaces were loosely divided. From the viewpoint of housing studies, it can be said that this has created a good living environment and positive human relationships. Thus, furniture has played a role in enhancing communal living in the dormitory.

Keywords:

Keywords: Meikei-ryô Dormitory, furniture and living, arrangement of furniture, individual space, communal living

1. はじめに

本稿では前稿に引き続き、藤井美羽（2022）の家具調査^{注1）}の成果を利用して、1980年代に明桂寮（1927年竣工）内に使用されていた家具をリストアップし、実際に明桂寮に居住し、今回の家具調査に参加した著者である薮下が、当時の記憶と資料を用いて、その寮生活を記録し、その意義を論じよう

とするものである。

これまでに、日本女子大学（以下、本学とする）の寮生活については、日本女子大学学寮100年研究会（2007）において考察が加えられているが、包括的であり、居室での詳細な検討はなされておらず、家具配置の実態やバリエーションは現在まで知られてこなかった。

家具の配置は、その空間の使い方を大きく変える

ことができ、日本は“しつらい”という言葉に表現されるように、伝統的に大空間を、家具を用いて使い分けることを行ってきた。ことに、部屋の規模が小さくなるに従い、家具による空間の使い分けの持つ意味が大きくなることは、多くの人が認識していることであろう。しかし、その配置方法や配置による室内の使用感に対する研究は、多くはない。公共空間ではなく個性性の高くなる住居の中についての研究は少なく、また住居の中でも公室の家具についてはいくつかの研究はあるものの、寝室等の配置についての調査・研究はほとんど見られない。

本稿では、寮生活の実態の記録を残すことに加え、使用されていた家具の特徴と併せて、把握することで、居室空間の住生活を総合的に理解しようというスタンスで記述した。寮の室内を共同で使用していた時期の記録をたどり、家具の特徴を踏まえた家具配置と生活空間の特徴を考察し、成瀬記念館等に保管されている写真の記録に加え、筆者のうちの藪下の入居時の記憶により、居室の利用状況の再現を試み、居室空間の使い方の検討を加える。

2. 居室の配置と利用の概況

本章では、居室の利用状況の再現を試みる。図1)に示したとおり、1980年頃の明桂寮は、全27室ある居室のうち、3人部屋は18部屋、2人部屋は9部屋あった^{注2)}。

明桂寮2・3階平面図

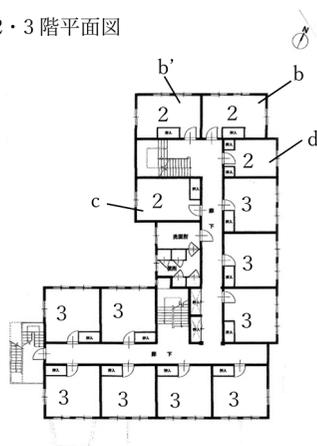


図1) 明桂寮の居室の人数と2人部屋の種類

※数字は居室内の人数、英字は2人部屋の種類を示す(図3参照)

※その他、1階に2人部屋が1室ある。(図3、2人部屋a参照)

居室の実測調査(2020)と家具の実測調査(2021)をもとに、平面図を作成した。

3人部屋は、2階の建物東側に3部屋、南側に4部屋、南廊下を挟んで北側西寄りに2部屋あり、3階も2階と同様である。また、角部屋は南側東端と西端、南廊下挟んで北側の西端にある。居室は図2)に示したように、入口より幅約4.26m、奥行約4.26mのほぼ正方形で、ドアは壁の中央に位置し室内に開き、向かって右側に約一間の押し入れが室内に造作されている。ドアのある壁と相対する壁面には腰窓が2窓と窓下の壁面中央にラジエーターが1台あり、角部屋には隣接する壁にもう1窓腰窓がある。これは3人部屋に共通の型となっている^{注3)}。また、3人部屋が最も数が多い。

3人部屋の入居者は、ママと呼ばれる年長者、アンコと呼ばれる中間の学年の者、スエッコと呼ばれる年少者であることが一般的で、学年を超えての共同生活空間であった。そもそも本学の教育寮は、家庭生活を模した場をつくり、家庭のマネジメントを模擬体験する場、また日本の生活改善の課題を見出し研究に結び付ける素材を見出し、また実験的な取り組みを行う場であった。特に、精神的な成長の重要性が唱えられていたことが、異学年での居室利用の背景にもあろう。それぞれのスペースを図2)に示す。

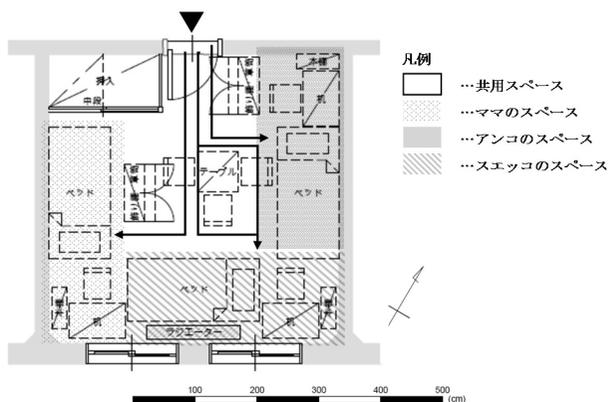


図2) 3人部屋平面図(ママは年長者、スエッコは年少者、アンコは中間の学年)

ベッドが廊下側以外の3辺の壁に沿うように配置され、ベッドの脇に学習机を置くことにより、3人分の領域を壁とともに創出をしている。入り口は、押し入れの壁と高さ170cmの箆筒・ガラス棚の

セット（以下、ガラス棚・箆笥と表記）とに囲まれることで、玄関的な空間となっている。廊下の公的空間と居室のプライベート空間とを区切るための空間である。半畳以下の広さであるが、この空間があることにより、ガラス棚・箆笥の裏におかれた学習机が、入り口ドアに近い空間であるにもかかわらず、個室感を感じることで利用できる空間として利用される配置である。ここがアングの空間となっている。居室にはガラス棚・箆笥がもう一組配置されており、ママのスペースのプライバシー性を高める役割を果たしている。ママのスペースは押し入れとガラス棚・箆笥とによりベッドを個室的空间の中に入れ込むことになる。枕の部分そしてさらにその奥にある学習机は、公的空間である廊下から離れることにより、静かな環境を得られる。学習机の場所は入り口からはガラス棚・箆笥により視線がさえぎられるという点でも、プライバシー性を確保できるしつらえである。170cmのガラス棚・箆笥が2組あることにより、正方形の限られた広さの部屋に、プライベートな空間を作り上げることができている。

窓際には最も低学年のスエッコの空間で、入り口ドア正面にベッドが置かれ、ドアをあけ放って使用すると廊下から見える状態となる。その枕元に配置されている学習机は、壁と窓に向いているため、入り口からは生活の全てが丸見えの状態となる。廊下からの距離は遠いため、廊下の音は低減することができた。

居室の中央部は、テーブルが置かれ、その背後にあるガラス棚・箆笥の中におかれた茶器やお菓子でお茶の時間を持つことが、夕食後の団らんのひと時の慣例であった。このお茶の時間を居室の仲間と過ごすことは、寮の生活時間の中のサイクルとして明示されていたわけではないが、ママと呼ばれる上級生のとりまとめのもとで、交流が行われていた。1980年代は、寮監が配されていない自治寮であったが、部屋の中での交流を大切にする文化が継承されていたことが確かめられる。

2人部屋は、図1)に示すように1階に1部屋と、2、3階に共通して長方形の4部屋がそれぞれにあたる。ここではa, b, c, dの4パターンを示す。入口ドアの相対する壁面には腰窓が1窓または2窓、角部屋にはもう1窓あり、それぞれにラジエーターが1台、一間の押入がひとつある。

部屋aは1階に唯一ある居室で、東に面しており、

幅と奥行、窓、ラジエーター、押入の配置は3人部屋と同じだが、入口ドアの位置は壁面中央ではなく室内から見て右端にある。

部屋bは建物北東にある部屋で、北面に腰窓が2窓、その壁面の中央にラジエーターが1台、東面に腰窓が1窓ある。西側に隣接する部屋b'はこの部屋との境の壁を軸として左右対称となっている。

部屋cは北廊下の西側にあり、腰窓は1窓、窓前にラジエーターがある。これら部屋bと部屋cは長方形だが広さは3人部屋とほぼ同等である。

部屋dは狭く、2階と3階の東に面しており、腰窓1窓とラジエーターが窓前にある。成瀬記念館所蔵の1925(大正14)年作成の青図によると副寮監室として設計され、狭くて押入の形状も異なっている。これらの2人部屋の共通点として、入口ドアの位置の関係で3人分の家具を並べ難かったという事情があったと聞いている。部屋a, c, dは家具を左右対称に置くことができたが、部屋bは難しく、広さに余裕があったので家具配置はいろいろと試すことが可能だった。ここに挙げる1980年頃の家具配置は数下の記憶によるもので、一例に過ぎず、様々な置き方があったと推測できる。

2人部屋は、ママと呼ばれる上の学年の者とスエッコと呼ばれる下の学年の者で構成されていた。それぞれのスペースを図3)に示す。

参考として、部屋の面積を人数で割った一人当たりの部屋の面積を表1)に示す。3人部屋では一人当たり6.65m²(約4畳)となり、2人部屋では部屋dを除き9.63m²以上(約6畳)を得られている。共用スペースも含まれているので、実際はそれ以下の面積であり、当時あった和室寮よりは広いが、あまりゆとりのない広さである。

表1) 1人当たりの部屋の面積表

		面積(m ²)	居室内の一人当たりの面積(m ²)
3人部屋		19.96	6.65
2人部屋 ※3種類あり	a	19.96	9.97
	b,b',c	19.27	9.63
	d	13.97	6.98
(参考) 4人部屋時代		19.96	4.99
(参考) 和室寮 ※2畳/人			3.3

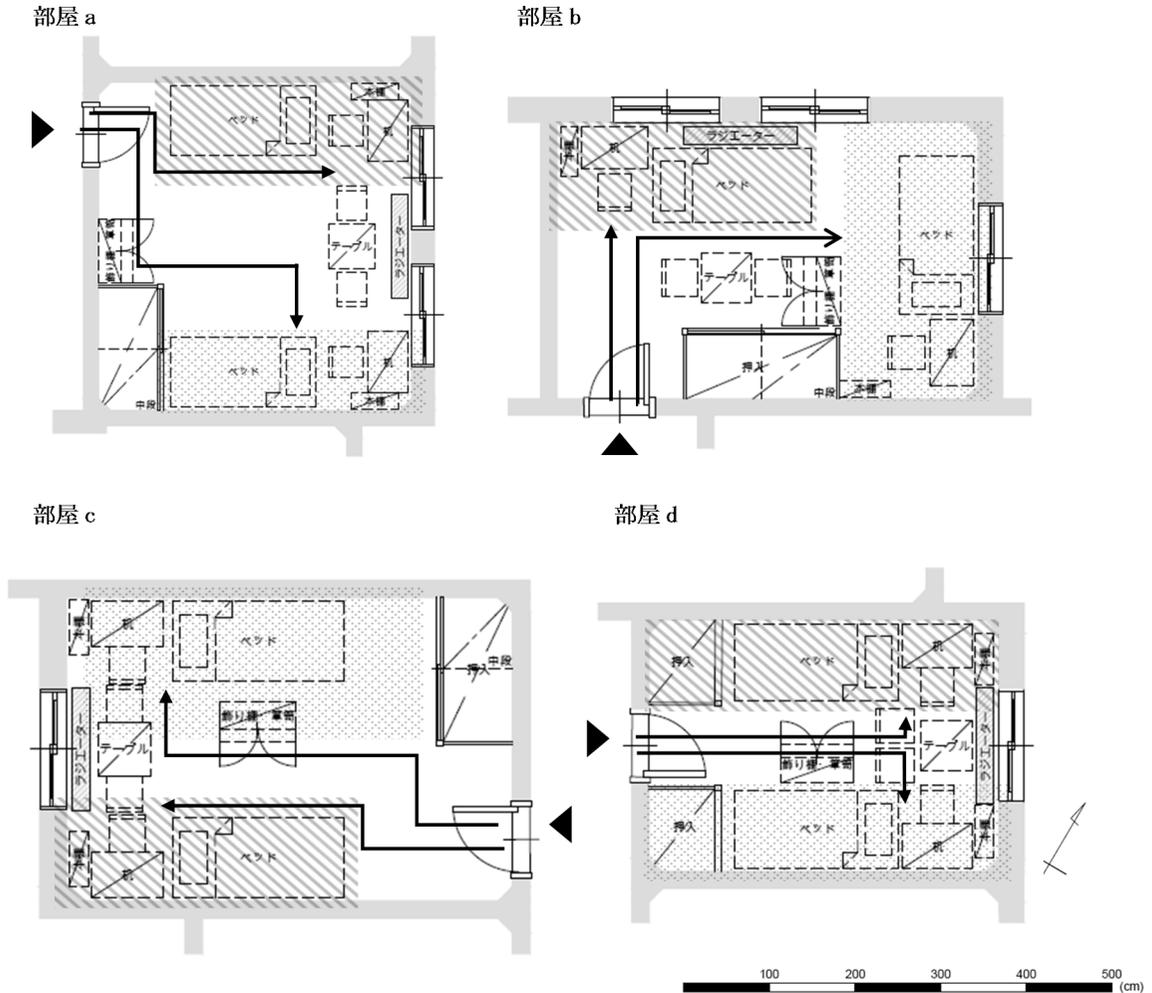


図3) 2人部屋平面図 a, b, c, d

3. 居室内の家具

明桂寮に保管されている家具は調査を行いデータベース化され、藤井美羽（2022）に示されている。そのうち表下の記憶の明瞭な居室内の家具を表2）に示す。

寮生に割り当てられたのは学習机と椅子、本棚、ベッドである。木製家具は、いわゆるアンティークブラウン色で統一され、居室の白漆喰壁、茶色の押入木枠や付長押といったしつらえと調和している。

部屋替えの際、家具は移動せずにその部屋に置かれているものを使った^{注4)}。学習机（表2①）は横並びに2つ引出しのある小ぶりの平机である。その

近くに置かれた本棚（表2⑦）は、中段3段、囲いのある天板を含めると全5段あり、多少不安定なものもあるが使用できた。藤井美羽（2022）の分類のとおり、形状はほぼ同じだが背面板の有無、脚部の形状などから3種類程度の本棚がある^{注5)}。学習机用の椅子（表2⑥）は座面と背もたれがビニールレザー製、脚部は鋼製パイプ式の軽くて丈夫、持ち運びしやすい形で、3種類程度ある。ベッド（表2④）はスチールパイプ製で、藁製で厚さ10cm程のマットが備えてあり、移動せず使っていた。ベッドは折り畳むことが可能だが、それらの重さからも日常的に折り畳んで移動させて生活するのはかなり困難である。一方、部屋の中で共用としていたのはガ

ラス棚・箆筒, 団欒用テーブルとそれに付属する椅子である。箆筒(表2③)には4段の深めの引出しがあり, ガラス棚(表2②)は両開きのガラス扉で中に仕切りがあり左右2つの空間に分かれている。箆筒にガラス棚を上置きすると高さが170cmとなり, 立って使用する高さであることや, 幅が90cmで和服を入れるのに必要な1mではないことから, 洋風家具であると言える^{注6)}。3人部屋では2組あ

り, 合計8段の引出しを3人で分け合って使っていた。

団欒用テーブル(表2⑤)は部屋の中央に置かれ, 3脚のパイプ椅子に囲まれている。

学習機の引出しと箆筒の引出しの取手金具は同じデザインであることから, 同じ工房で製作された家具である可能性がある。

表2) 居室内の家具

家具名	①学習機		②ガラス棚		③箆筒		④ベッド	
家具写真								
家具データ ※単位 数量: 個数 それ以外: 全て mm	幅 816	数量 15	幅 856	数量 49	幅 849	数量 47	幅 910	数量 38
	奥行 521	木材	奥行 299	木材	奥行 454	木材	奥行 1933	鉄パイプ製折りたたみ可
	高さ 727	塗装仕上	高さ 683	塗装仕上茶色系 硝子入両開建具	高さ 1031	塗装仕上茶色系 引出し4段 鍵穴	高さ 838 床面高 500	塗装仕上薄緑色
使用実態	学習機としては小ぶりだが十分な大きさだった。引出しは小さく, 主に文房具や貴重品を入れていた。		洗面用具, 化粧品, 小物類などを入れていた。見えないようにガラス面に布など貼る人もいた。箆筒とセットの家具で, 箆筒の上に乗せて使用していた。		引出しは深めで, 出し入れに少し力がいった。一人当たり2または3段ずつ使用した。鍵は使っていない。		頑丈な感じだった。上にマットレスが備わっていた。	
家具名	⑤テーブル		⑥椅子		⑦本棚			
家具写真								
家具データ ※単位 数量: 個数 それ以外: 全て mm	幅 600	数量 6	幅 404	類似品含む総数量 69	幅 601	類似品含む総数量 43		
	奥行 600	ベニヤ合板脚部鋼製	奥行 547	脚部鋼製 ビニールレザー張	奥行 201	木製ボルト留め		
	高さ 715		高さ 767 座面高 425	内部ウレタン	高さ 1190	塗装仕上茶色系		
使用実態	各居室の中央に置かれクロスを掛けて団欒用テーブルとして使用していた。		この形状の椅子が学習機の椅子として複数の寮で使われていたが, 明桂寮で使われていたものの特定は調査中である。		形状のほぼ同じ5段の本棚が各人用に備えてあった。			



図4) 3人部屋の家具配置を再現した写真

4. 寮生活と家具の使用感

本章では、筆者の数が居住していた際の家具の使用感を中心に記述する。明桂寮では異なる学年で部屋を構成するしくみができており、1980年頃の3人部屋はママ（年長者、主に3、4年生）、アンコ（中間の2、3年生）、スエッコ（年少者、1年生）と呼ばれ、それぞれの居住位置は決まっていた。4月の入学、すなわち入寮時に、新1年生はスエッコと呼ばれ、各部屋に一人ずつ配されて先輩の指示のもと自分の場所で荷を解いた。自分に割り当てられた家具の傷や歪みに驚き、恐々と扱ったが、次第に慣れて自分のものとして使っていた。

ママと呼ばれる年長者の空間は入口ドアを開けた右側の、ガラス棚・箆筒と簡単なカーテン状の布で目隠しされた向こう側に学習機と椅子、本棚、ベッドがある。押入れの奥の中段は使いにくさもあって主にママが荷物置きとして使っていた。アンコと呼ばれる2年生または3年生は、入口ドアの左側にガラス棚・箆筒を置きやや見えにくくした裏側に学習機と本棚、椅子を並べていた。スエッコは正面の窓、ラジエーターの手前に学習機とベッドを並べ、最も日当たりが良いと同時に、何も隠せない丸見えの位置であった。当初は戸惑う者もあったが、次第に慣れて気にならなくなっていく者が多かった。

2人部屋の場合には、中間のアンコと呼ばれる立場がなくなり、ママとスエッコと呼ばれていた。こ

れと同様に、ドアから見えてしまう位置にスエッコがおり、ガラス棚・箆筒でやや目隠しされた場所がママの領域である。（図2、図3参照）

仮に、部屋の全員がママと同様の目隠しを求めたら、共用スペースも部屋全体も狭苦しいものになっていたであろうが、そうしなかったのは皆が部屋の調和を意識していたからだと推測する。

寮生3人の学習機やベッドの頭側は、適度に距離を離しながら、お互いの気配を伺い知ることができた。家具は借り物であっても、自分の所有物を入れることで、相部屋において自分の大事な専有空間を示した境界となっていた。空の状態であると違和感があった古びた家具も、自分の所有物を入れることにより、古い部材は目立たなくなり、自分のものという気持ちになれたように記憶している。そして、持参した本や小物を並べ、ベッドカバーをかけ、独自の生活の場を作り、また人それぞれの個性を見ることができた楽しさもあった。

寮運営という面からは、ママは卒論や勉強に重きを置きながら部屋の様子を見守り、アンコは最も外出が多く寮内の係や委員活動など盛んな部屋の中心的存在であった。最も他の部屋の人との訪問が多かったのは、アンコではなかっただろうか。こういった訪問者とのやりとりにあたっても、ドアに近い場所は、同室の他者を煩わせずに訪問することができる利点があったのであろう。スエッコは寮生活を先輩方から吸収していくという寮文化があり、生活の

様子が丸見えであると同時に、周囲の人からスエッコが何をしているのかはすぐにわかるため、声をかけやすい配置である。このような状況であることが、新たな入居者であるスエッコを、寮の仲間として受け入れやすくしていたのではないかと考えられる。

以上は1980年代の使用感を記録したものであるが、他の年代の写真やヒアリングからたどっても、1980年代の配置と大きくは異ならないことが確認されている。教育寮としての運営方針についての多少の変化はあるものの、ともに暮らす家族のような存在であることについての大きな変化はなかった。そういった中で家具の配置が定着してきたことは、小さな家具であってもある程度のプライバシー性の確保された領域を部屋の中で構築しつつも、模倣的な家族のような関係性を短期間で築くことを可能とする、開放性を有する高さとボリューム感であったと考えられる。視界を完全にさえぎるような高さではない家具を3人の間にうまく配置していた。また同時に、これらの家具に私物を入れたことでの、自分のものになる感覚は、自らの領域性を感じるものでもあった。

限られた部屋の面積の中で、存在する家具に変化がないことから、この配置は定着したと推測できる。

5. 家具配置の再現による考察

家具の調査に合わせて、保管されていた家具を実際に使用して、1980年代の3人部屋の居室の家具配置を再現し、撮影したものを図4)に示す。4章に示した図面上の家具配置においても家具同士の距離が小さかったが、実際並べてみるとやはり余裕なく置かれていることがわかる。部屋に入り中央の共用スペースを通過して各人の学習机や椅子に到達するのに、ベッドとベッド、またはベッドと箆笥の角をすり抜ける必要があり、狭いところでは40cmに満たないことが確認された。団欒用テーブルとベッドの間も60cm程度で、椅子をテーブル下に入れても体や椅子とベッドに触れながら通る狭さである。また、ガラス棚・箆笥は背丈を越えるほどの高さになっていたが、それでもあまり部屋を窮屈に感じなかったのは、天井高が約2.5mと高く、また廊下幅約1.65mと広く、建物が全体的にゆったりと構えていたことと考えられる。一方で、2人部屋の部屋a、b、cは3人部屋と同等の広さを2人で使用しているので、一人当たりの床面積は1.5倍となり

ゆとりがあり、学習机までに狭いところを通る必要はなかった。

家具の使い方の特徴的なことは、ガラス棚・箆笥を仕切り代わりや視線を遮る簡単な目隠しとして利用し、自分の空間をより確保しようとしていたことが挙げられる。前述のとおり、ガラス棚・箆笥は高さ170cm程度であり、目隠しには適切な高さである。箆笥は一般的には壁際に置くものであり裏面は仕上げられていないが、これらの箆笥やガラス棚も裏面は仕上げられていない。箆笥と上部のガラス棚の奥行は約15cmの差があり、通常は背面を揃えて設置するものであり、箆笥の天板はガラス棚の乗る部分の奥行のみベニヤ合板に切り替えている。しかし両者を繋ぐダボ穴もなく乗せているだけなので、箆笥の前面に合わせてガラス棚を設置し、裏面にできる段に小物を置く者もいた。地震などあれば容易に転倒落下の危険性があった。関東大震災(1923年)の僅か4年後に開かれた寮であるが、当時は家具の地震対策についての検討がされていなかったと推測する。

開寮時はこれらの2、3人部屋はすべて4人部屋とされており、折り畳み式ベッドを使用し日中は部屋の隅に片付けていた^{注7)}。2、3人部屋に移行した時期は調査中であるが、そこではベッドを固定化することで、個人の領域を各々が壁沿いに確保することができた。それにより、ベッドの上下の空間も使うことができ、上にはロープを張り洗濯物を干す人もおり、下には荷物を置くことができた。また起臥を各人の自由な時に行うことも可能になり、生活の自由度が増した。

もう一つの特徴は、部屋の中央に団欒スペースを設け、のちにママが電気湯沸ポットやオーブントースター、部屋の人数分の食器等を揃えてアンコヤスエッコが使えるようにする慣習となったことである。(図2、図3、図4参照)食器等はガラス棚の片側に納められた。明桂寮には他の寮にあるような階ごとの談話室やミニキッチンが設置されていなかった。従って、食事の提供のない土日の飲食や歓談時のお茶などは、食堂まで行かず自室で済ませるのが都合良かったことがあった。結果的に室内での交流時間を増やす効果ともなり、各部屋単位でまとまり、部屋替えやそれぞれの交流により70名余の大所帯の寮生が自然にまとまっていった。多くの寮生は学年の上下関係に従い、先輩たちから教えられた生活を受け

入れ、おおむね円滑な寮生活を送った。寮で築いた友情によって卒業後も長く交流が続いているという話は、明桂寮に限らない。

6. 先行研究との比較検討

日本女子大学学寮100年研究会(2007)に掲載されている明桂寮室内とされる写真(p.36,120)は家具や窓枠の形からそのように推定されるが、明桂寮が生まれる3年前の1924(大正13)年に建てられた旧泉山寮は木造2階建の洋風寮で^{注8)}、そこで使われていた家具は明桂寮の家具と類似しているため、見分けが付きにくくなっている。そのため、今回目視で確認したところ、明桂寮の居室には、すべて付長押があり、柱型や梁型が形や場所が各部屋それぞれに異なるものの存在した。成瀬記念館所蔵の写真1)には付長押がはっきりと写っており明桂寮といえるが、この時すでにガラス棚・筆筒がすでに壁から離して置かれている。1928(昭和3)年ころの写真と言われており、開寮して早い時期からこのように間仕切りとして利用されていた可能性がある。また、居室の使い方として、和風寮については、筆筒はなく、押入れ内に小引出しを設け、ハンガー掛けを室内に置きカーテンで仕切るといった記録にとどまっている。これらにより、旧泉山寮と明桂寮は、



写真1) 明桂寮室内(成瀬記念館所蔵)

洋風寮ということもあり期待を込めて家具をあつらえたことがうかがえる。しかし、何らかの目隠しの空間を設ける工夫があったことはこれまでの和風寮にも見られており、相部屋においてひとりの場所が求められていたことを再認識できる。

名称 設置場所	①テーブル 食堂・図書室	②テーブル(電話台)	③椅子 ドライヤー室	④ソファ 食堂・テレビ前	⑤本棚(上) 寮務室
					
名称 設置場所	⑥本棚(下) 寮務室	⑦本棚 図書室	⑧本棚 寮務室・電話台	⑨衝立て 応接室	⑩玄関用飾り棚 成瀬記念館所蔵
					

図5) 明桂寮内にあったと記憶する家具(居室を除く)

7. 居室以外で使われた可能性のある家具

藤井美羽（2022）で調査された家具のうち、先に論じた居室内の家具以外に、明桂寮内にあったと数下が記憶する家具を図5）に示す。これらについても今後の調査としたい。

テーブル（図5①）は、類似の3種類合わせて16台見つかったことから、食堂テーブルとして使用されたものと推測する。1980年頃はテーブルクロスをかぶせていたため、実際に中を確認してはいないが、数量や大きさからその可能性は高い。同様のテーブルが図書室と呼ばれる1階の居室でクロスをかけずに使われていた。

ソファ（図5④）は、食堂のベランダ（小空間）との境目に置かれたテレビの前にあり、人気番組の時間には仲良く並んで座って視ていた。

寮務室にはいくつもの本棚や台が置かれており、本棚上下（図5⑤⑥）と本棚（図5⑧）はそれに当たると推測する。

玄関用飾り棚（図5⑩）は毎朝夕にこの横を通り登校しており、使ってはいなかったが、洒落た家具だったので印象に残っている。

8. まとめ

以上により、確認できたことをまとめる。①明桂寮内に保管されている家具は、明桂寮以外で使用された家具もあるが、明桂寮で1980年頃に使われていたものも多数含まれていた。②藤井美羽（2022）の資料調査では、籐製の椅子やベッド、木製の椅子など多数写っている写真がみられるが、明桂寮内には確認できなかった。③家具は相部屋においては専有空間の境界となっており、目隠し的な使い方は生活上必要な方法だった。④部屋単位で団欒スペースを作り交流を深めることができた。⑤居室は十分な広さがあったとはいえ、特に3人部屋では動線上の家具間の通り道が狭いなどの不便があり、必ずしも理想的な家具配置とは言えなかったが、寮生同士の人間関係の良さや工夫により快適な寮生活を求め実現していった。

1980年頃の寮は、寮監のいない自治寮の時代であった。数下をはじめ多くの寮生は、先輩たちから「憧れの洋館」と近所から言われていたことなど、語り継がれる話も少し耳にしたが、寮や建物について多くを知らないまま、半世紀前に建てられた重厚

感のある建物に住み、永く使い継がれた家具で寮生活をしてきた。寮生は大学の歴史に触れながら、家具を通じて生活様式を構築し、後の世代はそれを受け継いでいった。年月を経て傷みの激しい家具はあるが、状態の比較的良いものもある。明桂寮の建物と共に活かされ使用されてきたものであり、これらは1世紀近く前に作られた家具類を含んでおり希少性も高い。大学の歴史のひとつとして保管や展示、利活用の方法を検討していく必要がある。家具の使われ方の詳細な経緯については本稿では十分に論証できなかったため、今後の論題としたい。

注釈

注1) 家具調査の概要は、前稿（藤井美羽ほか）の注釈3）を参考にされたい。

注2) 貯蔵室、住み込み調理員室（元主婦室）、調理員休憩室（元女中室）は、当時の学生が立ち入ることができず、どのような家具が使われていたかは不明である。また、地下1階の元浴室と脱衣室については、1980年頃は誰かが立ち入る気配もなく、物置のように感じていたが、それ以上の部屋の様子は知られていなかった。

注3) 2階南側西端から2番目の居室の東寄り窓のみ掃き出し窓で、1階食堂ベランダの屋上に入出りできる。またラジエーターは掃き出し窓を除いて西寄りの窓の前に設置されている。家具の配置はこれを特に考慮せず、通常の3人部屋の家具配置と同じである。

注4) 部屋替えは開寮時から年に3回（4月、9月、1月）行っており、部屋の日当たりや広さ、人間関係の不満などの解消になっていた。

注5) 中野夏貴（2015）によると、本棚は早稲田近くの古道具屋さんなどで買ってきてそれぞれ自分で組み立てたという証言が得られている。

注6) 新井竜治・芝浦工業大学特任教授によると、開寮時の1927（昭和2）年は和装が主流の時代であったが、洋服の時代を見越しての洋風筆筒だったと推測できるとのことである。

注7) 『家庭週報』904号（昭和2年9月16日付）に4人部屋だったという記述がある。また、日本女子大学女子教育研究所（1994）によると、昭和20年度の卒業者は4人部屋だったと

証言があるので、少なくともその時期まで4人部屋であった。

注8) 日本女子大学 (2001) p.335 に〈泉山寮 (洋風寮)〉の開寮年は1938 (昭和13)年、とあるが1924 (大正13)年の誤りである。

参考文献

- 1) 高橋文男, 初見学, 杉山茂一, 鈴木成文: 家具配置から見た居間の住み方と平面型: 住居内公的空間に関する研究 (その1), 日本建築学会研究報告集計画系 **50**, 193-196 (1979)
- 2) 日本女子大学女子教育研究所編: 日本女子大学学寮の思い出 一座談会を中心に一, 日本女子大学女子教育研究所 (1994)
- 3) 石井京子, 友田博通: 住宅の立体的空間構成に関する研究: 吹抜けの居間の家具配置と使われ方について, 日本建築学会学術講演梗概集 **E-2**, 建築計画 **II**, 395-396 (1996)
- 4) 日本女子大学編: 日本女子大学学園事典—創立100年の軌跡, 日本女子大学 (2001)
- 5) 竹田喜美子, 番場美恵子: 公室空間における起居様式の傾向 一輸入住宅における住まい方に関する研究 (その2), 日本建築学会計画系論文集 **66 (542)**, 105-112 (2001)
- 6) 日本女子大学編: 写真が語る日本女子大学の100年—そして21世紀をひらく, 日本女子大学 (2004)
- 7) 日本女子大学学寮100年研究会編: 女子高等教育における学寮 一日本女子大学学寮の100年, ドメス出版 (2007)
- 8) 谷口久美子: 居住空間における空間経験と規模感覚との関連性に関する研究, 文化女子大学紀要 (服装学・生活造形学研究) **30**, 117-124 (1999)
- 9) 中野夏貴: 佐藤功一による寮建築の研究—日本女子大学の明桂寮を対象として (日本女子大学家政学部住居学科卒業論文), 私家版 (2015)
- 10) 藤井美羽: 日本女子大学の学寮における家具・什器一覧化と考察 一明桂寮を対象として (日本女子大学家政学部住居学科卒業論文), 私家版 (2022)

謝辞

本稿は、藪下が証言を盛り込まれている藤井美羽 (2022) の一部を再構成したものであり、日本女子大学総合研究所研究課題 75 の一部として取り組んだものです。

新井竜治・芝浦工業大学特任教授にはご助言を賜り、作業に当たっては石田雅美氏にご助力をいただきました。元寮生の方々にもご協力いただき、心より感謝申し上げます。